

犬養道子との関係に見る晩年の犬養木堂

— 道子の証言を中心として — (I)

時任 英人

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2014年10月1日 受理)

はじめに

政治家の人間像を描くことは、容易なことではない。その政治家が分かりやすい行動をしたのであれば簡単であるが、「複雑」と言われるような性格の人物の行動を描く場合は、とくに困難となる。

犬養毅(号・木堂)は、「複雑」な性格の政治家であるため、そのことに注目する必要があると指摘されるほどである[註1]。しかしながら、家族にはそうした複雑な側面は見せることなく行動したはずであり、妻の千代や息子の健(たける)、その嫁の仲子たちには、分かりやすい行動をとっていたであろう。とくに愛情と優しさで対応したのが息子夫婦の頑是ない娘の道子(犬養は道子を「道公」と呼んでいた)であった。むろん、その弟の康彦にもそのように振る舞ったであろうが、如何せん康彦が4才の時に木堂は暗殺されたので、その記憶は残ってはいないであろう。

その意味では、晩年の木堂のそうした心情を受けていたのは、道子である。道子は、幼少の頃から病弱であったため、木堂にとっては常に配慮したくなる孫であったようである。

その道子が木堂との交流を感じたままに書き記した著書は、家庭での晩年の木堂を縦横に描いているため、政治的人間としての木堂を検討する場合には理解しておく必要があると思われる。そこで、本論の目的は、孫の眼を通して見た晩年の犬養木堂を描くことにある。

さて、息子の健があの日を道子との関係で、次のように追想した文章がある[註2]。

私は幾度か逃れる如くに娘道子を伴うて庭に出た。娘の頭脳には小安息を与へたかつた。私と娘とは日課の如くに庭園の東隅なる榎〔イチイ科の常緑高木〕の老樹の下に行つた。父は十五日の夕刻四時頃、宛も低徊去り難しといふ趣で長い間この木の梢を仰いでゐたさうである。私と娘とは又屢々庭園の南隅に出た。其処は遙に品川湾を展望する高台であつた。高台の崖に沿つて閑かな小径がめぐらされてある。娘は二人限りになると、私に向つて、此処の小径では「お祖父さま」がいつぞやかう仰つた事がある。此処の土にはこんな花の種を蒔かれた事がある。この崖からはJOAK〔NHKの前身である東京放送局のこと〕の建物を教へて下さつた事があ

る。と追憶をたどつて次々に聴かせた。道子はまた言つた。十五日のあの同時刻には、外務大臣官邸でテニスの真似事をしてゐたが、不意に中止して、「わたしお祖父さまの所へ行くわ」と云つた刹那に、人が駆けつけて凶変を知らせたのだと。これらの囁きが私の耳には至上の音楽のやうに響いた。

明らかに道子は、ある意味では最晩年の木堂と最も多くの時間を過ごし、木堂がもっとも交流していた肉親の1人であった。

あまりに道子は木堂に可愛がられたため、党葬の時の納棺に際して道子が木堂が穿いていた靴下を入れるのを目撃した者たちは、皆涙を流したほどであったという。健によると暗殺された直後は「お祖父様がなくなつたらもう学校へ行きたくないなどとガツカリしてさびしがつてゐるので、今までは余り寄り付かせもせず、寄りつきもしなかつたのですが、父に代つて日に二三度はひつぱりだして芝生を散歩してやつてゐます」[註3]というほど、木堂の突然の死はショックであった。

それゆえ今日、道子が残している文章には、孫の目を通して見た最晩年の木堂のことが描かれている。

1 木堂における道子の登場

犬養道子は、1921（大正12）年4月20日、健の長女として東京都新宿四ツ谷に生まれた。木堂と同じ誕生日であるが、これも運命であろうか。

当時父親の健は、白樺派の作家として同人たちとの付き合いを深めているさなかで、家庭にはそうした白樺派の雰囲気があふれていた。また母親の仲子の父は、著名な医師であり、政府の医学関係の要職を歴任した長与専齋であつたうえに、祖父も日本胃腸病学会を創立した長与称吉（妻は後藤象二郎の娘）である。したがって、道子は著名な家系の血統であつた。1855（安政2）年4月20日に生まれた木堂とは66歳年齢が離れている。幼少の頃から木堂の家に住み、五・一五事件を近くで目撃したことから、事件と木堂のことについて、貴重な証言をしている。その後、津田英学塾（のちの津田塾大学）を中退した後留学し、ヨーロッパに在住していた期間や帰国した後も一貫して飢餓や難民問題にとりくみ、その一方では著述家としても多数の著書を発表し、1998（平成10）年には『犬養道子自選集』全7巻を岩波書店から刊行している[註4]。

道子と木堂との関係の始まりについては、木堂から道子に宛た多数の書簡がいろいろなことを明らかにし



図1 1925年頃

ているが、もっとも大きなことは木堂が道子を可愛がっていたという事実である。書簡だけではなく、残された写真で政界での厳しい表情とは違って道子に寄り添われている木堂は、大変幸福そうである。

このような書簡と写真の多くは、犬養が長野県の富士見に別荘・白林荘を持った時期に集中しているようだが、実際この頃木堂は政界での活動に限界を感じはじめ、重要な政治交渉や工作は側近中の側近である古島一雄[註5]に一任し、自らが中心的存在であった革新倶楽部を当時の大政党である政友会と合同させた直後、実際政界から隠退した。その直後、地元の支援者たちが補欠選挙で再び衆議院議員に当選させたものの、本人は政治責任をとる形で富士見に足繁く通う日々を送っていた[註6]。

当時の木堂が道子に書いた書簡には、カタカナ書きで、好々爺の感情が素直に表れている。道子は小学校1年の時に母親が留守にした際に冷水の風呂に入ったことが原因で肺炎になり、完治するまで時間がかかった[註7]。そのため木堂を始めとする家族がいろいろ心配したようで、それゆえ公に利用できる健に宛た木堂書簡には、道子の健康を心配する内容のものが目立つ。

犬養の書簡に道子らしき人物が初めて登場するのは、1921年9月1日に関東大震災が勃発した直後である[註8]。その8日前に内閣総理大臣の加藤友三郎が死去したことから、首相不在という状況のさなかに組閣された第2次山本権兵衛内閣に通信大臣として入閣した直後の書簡である。このとき道子の父親の健は軽井沢に滞在しており、地震直後に東京に帰宅しようとしたようで、これにたいして木堂は自宅と長女の婿の芳沢謙吉の住まいの被害状況を報告したのち、地震の影響で鉄道が「大混乱」しているため、帰京を思い留まり、「子供〔これが道子で、長男の康彦が生まれるのは1928年〕などを伴っての旅行八困難なるべし三四日間ニ少しハ静るべし其上にて帰京するを得策と存候」[註9]と書き送っている。この翌年は、「氷塊をなしたる」豆腐を贈呈されたことにたいする礼状の中で、これを見たのは初めてゆえ「児孫とも珍らしく感じ」[註10]とも書いている。この「児孫」も道子である。

このようにして道子は、木堂の書簡にデビューしたのである。

木堂は、とにかく道子が可愛かったようである。肺炎になる前から喘息気味であった道子にいろいろ配慮することになるが、1927(昭和2)年6月8日付の書簡では、次のように書いている[註11]。

ヲテガミヲ アリガトウ スナアソビノバショ トスベリダイ ト スグコシラエル
カラ ライゲツキテヲクレ ヲヂイチャマ ワ キンジツ カエリマス ソシ
テ マタ フジミ ニ キマス

道子にたいする木堂の思い入れがわかる内容である。しかしこののち道子が肺炎にかか

ると木堂の書簡には、道子の健康に関する心配が切実にあらわれることになる。

1年を過ぎても肺炎はなかなか完治しなかったようで、木堂は道子の母親の仲子に宛た書簡で「道子の咳今ニ全治セヌ趣困却也兼て申す如く学業ハ一年ヤ二年後れても苦しからず健康第一ニ注意せられたし」と述べたのち、白林荘が以前より広がったので、子供が遊ぶのに「都合」が良いため、暖かくなったときに「日光浴」をさせることを勧め、この別荘に誘っている[註12]。

また、いよいよ道子を熱海にある、犬養の政治的パトロンの人であり、犬養と「気質の相似」があった三浦梧楼[註13]の別荘で療養させようと考えて、父親の健に次のように指示している[註14]。



図2 1925年頃

・・・今日又熱海ニ行く筈ニ付、道子転地保養の事ニ付て相談致度、此使と共に来られたし 要するニ夜具と食器を持参すれハ三浦別荘にて事足るべし 入用のもの左の如し 朝食ニ用ふるナイフ・コヒー茶碗・ヒ飯茶碗ハ熱海にて買入れてもよし 夜具ハシーツ・毛布を携へ来れハ 其余ハ宿屋にて新調のものを借りても間ニ合ふ也

この白林荘で子どもたちにたいする木堂の様子を伝える植原悦二郎の証言がある[註15]。

先生は稀に見る剛毅の人であつたが、その反面に於ては溢るゝが如き仁愛と温情の人であつた。数年前、僕は信州上諏訪の湖畔に、或る人の別荘を借りて家族と共に避暑して居た事がある。すると、一日先生が愛孫道子さんを連れて、僕の所を訪問された事があつた。その時、僕の家の子供と道子さんが仲よく遊んでみたので、帰りがけに先生は僕の子供二人も連れて富士見に帰らうと言はれた。が僕の子供は当時女の児が九ツ、男の児が七ツ位みであつたので、夜になつて泣き出しでもすれば困るからお止しになつたらよからうと言ふと、先生はなアに、子供は可愛いんだと言つて、二人の子供を同伴されて富士見に帰られた。果してその夜、僕の家の子供は淋しがつて泣き出したさうだが、先生は更にそんなことには頓着せず、翌日僕が子供を迎へに行くと、なアに子供は慣れゝばよいから、もう一日二日も遊ばせて置いたらよからうと言はれた。之によつてみるも、先生が如何に温情に富んで居ら

れたかを知ることが出来よう。

憲法学者であった植原は木堂に口説かれて政界に入り、国民党から革新倶楽部、そして政友会という具合に、木堂が存命中は共に行動した。植原が伝える白林荘の木堂が子煩悩であったことを窺うことができる。

2 道子における木堂の登場

普通の子供のように「御人形遊び」が大好きだった道子は、自宅に出入りする人たちがいかに政界の大物たちであるかを知るはずもなく、家系がどのようなものか、とくに祖父が明治・大正・昭和の政界でほとんど野党として活動し、最晩年の混沌とした時代の入り口で首相に就任することになる大政治家であるということについての認識もなかった。

子供心に、祖父が関係している政治や、それに関わる人物たちがどんなことをしているかを理解するよりも、どちらかという父親を訪れる人物たちの方が道子には理解しやすかったからのようだが、正確に理解するには、そのときから何年も過ぎた後になってからである。

道子が生まれた前後に次第に作家として評価されはじめた父親の健は白樺派の作家であった。そのため岸田劉生、川端康成、芥川龍之介たちのほか、武者小路実篤や志賀直哉ほか多数の人物たちが自宅に出入りし、彼らは道子に話しかけてきた。その人物たちの話が理解できた場合があったことから、彼らに好意をもった。後年追憶のなかで道子は、こうした人物たちがまさに「花のごとく星のごとき存在」であったと書いているほどである〔註16〕。

道子は木堂を当初、「上等な植木屋」と思っていたらしいが、理由は「もんぺばかり、着ているから。背中を丸めて土の上にしゃがんで、草をとったり、木の枝の虫をはたきおとしたりしていたから」だという〔註17〕。確かにこの時期の木堂は白林荘ではもんぺを着ていた。

木堂（四ツ谷のお祖父ちゃま）が道子の記録に本格的にあらわれるのは、病気の治療をしていた日である〔註18〕。

ある年の冬。みぞれが鈍い空をぬらしてあたりいちめん、凍りつく寒さをまき散らした夕方。枯れた庭のまん中に、突如、四ツ谷のお祖父ちゃまがあらわれた。私は庭に面した茶の間のまん中で、ハァーハァーと吸入をしていた。

お祖父ちゃまの来訪は、ちょいちょいのことではない。しかし、彼が来るときは、茂〔女中〕も高橋さんも、父も母も、たれひとり緊張しないのだった。縫紋羽織のお祖母ちゃまの御来訪のときは白と黒ほどの相違だった。

「やあ、おとうさん」

「あら、おとうさま」

お祖父ちゃまはラッコの襟のついた黒外套を重たげに着込んだまま、縁側のガラス戸を自分で開けて入って来て、「道公、どうした」と私の背に手をかけた。私は吸入器の口をくわえたまま、横目でお祖父ちゃまを見て笑って見せた。

お祖父ちゃまは火鉢に向ってしゃがみ込み、外套の内ポケットから白い分厚い封筒を出して、母の前に置いた。

母は、その中身を注意深く見て、あらおとうさま、と何度か頭を下げた。白い封筒が彼女をひどく喜ばせたらしいことは私にも感ぜられた。お祖父ちゃまは来るたびに、いつもみんなを喜ばせるのであった。

「やあ、おとうさん」

と父は、母の手もとの白い封筒を、首をのばしてのぞきこんだ。

—その翌日、私たちは人力に乗り、汽車に乗った。着いたところは、暖かった。

着いたところは熱海で、先述した三浦梧楼の別荘だが、三浦は木堂の「同情家」という関係だった[註 19]ので、ここを借りることができたのであろう。明治時代から木堂は三浦とは親しくしていたものの、当初は三浦の別荘を使うのを遠慮し、気を使っていた[註 20]。しかし、1926（大正 15）年 1 月に三浦が亡くなってからはそうでもなくなり、頻繁に使っていたようである。

木堂は、このころ何故そうまで、道子を可愛がったのであろうか。政治家に限らず人が自分の孫を愛しく思って可愛がるのに理由はないかもしれないが、木堂の場合は政治行動にあらわれた性格上の厳しさが、そうした印象を与えるのかもしれない。しかし木堂も人の子であるから頑善はない自分の血を分けた子供や孫には人一倍優しく、愛情をもって接した。

1892（明治 25）年に入籍した千代夫人の間に 3 人の子供をもうけ、長女の操が外交官芳沢謙吉（のち犬養内閣の外務大臣）に嫁ぎ、下の娘の信は多田正俊の妻となったが、もう 1 人が彪で、生後 3 カ月で亡くなった。その彪が亡くなった件について、木堂の支持者であった岡山県会議員が子供を亡くしたということを知ったときの書簡で次のように述べている[註 21]。

・・・令息之訃音只今落手致し驚入申候、貴兄御心中察上、何と御慰申様も無之、小生も愛児を喪ひし経験有之 人の弔慰之語も断腸の種と相成候ものにて人間之不
幸斯迄 甚しきハ無之、御葬式相候ハ、イヅレか気ヲ転する為め、海岸にでも御
出懸可被成、葬式後ハ必ず健康ヲ傷ふものに御座候間、御注意可被成候・・・

木堂は最初の妻の子供である健にはもちろん優しく接したようであるが、健は正式に入

籍した千代に当初冷たく扱われたようなので、そうした印象はないようである。そのような経緯があったから、健自身は木堂にたいして「小学校から中学校時代を通じては恐くてもいいへ」なかったが、「高等学校時代にはその性格に何かの魅力を漠然と感じ、大学時代にはハッキリと好きになり、更に文章を書き本を読んで生計するやうになつた時代には、自分にとって最も親しみのある『性格』の一つになつた」[註 22]ということだが、健が父親木堂を心から好きになるには時間がかかったようである。自分の生みの親を追い出した千代にたいする感情がその夫である木堂を遠去けたのであろう。

しかし生まれながらに優しい心の持ち主である健は、結婚して家庭をもち、子どもも生まれ、おまけに小説家になったとは言え生活もままならないために木堂から支援を受けはじめると、そうした木堂を自分の方から理解しようとし、好きになってきたのであろう。

木堂は、健にたいする自分の思いを、次のように述べている[註 23]。

・ ・ ・ 凡そ人の学業并事業ハ其人自身の好むものを選て之ニ専心熱中するに非れハ成就するものにあらず、故ニ小生ハ何人に対しても此意を以て勧告する也、健の如きも親類などハ勿論、学習院の教師なども法科を勧め居たれど、健自身が哲学希望なるが故ニ其意に任せたり、

健が希望する方向での進路を支持しているが、本来であれば健には法科に進学させて、弁護士にでもさせたかったのであろうが、本人の希望を叶えてあげようとするところに健にたいする木堂の愛情を窺うことができる。

道子は記憶がはっきりしてきた当時の木堂について、「遠い道を、重い責任を負うて、やっと歩き通したから、お祖父ちゃまはそのころ、『政界引退』を声明して、束の間、ひまであったのだ」[註 24][註 25]と証言しているが、これはおそらくその通りであろう。

木堂は政友会の長老であったため、これといった活動はなかったようである。むしろ、自分が主唱者の1人であった普通選挙のための活動や党員の支援といったことはあったかもしれないが、それ以外には党から要請された活動はなかった。となると、それまでの多忙な日々を費やしていた時間を埋めるのは大変であった。そこに健の娘の道子が次第に成長し、可愛い盛りとなったことから、政治的空白による精神的虚脱感から逃れる恰好の存在となったように思われる。

物心がつきはじめ、利発な道子は木堂にとって優しさをあらわせる孫だったのである。また、道子の方も木堂との時間を楽しんでいたようである。

明治十年代からはほとんどの時間を政治に費やし、そこでは心が休まる時などなかったかもしれない。木堂が所属した政党はいずれも政権政党になることはほとんどなく、常に万年野党であった。しかも木堂の性格と資金難から木堂の派閥は、多数派にはなれず党内の敵も多かった。それが明治の終わり頃に党内抗争を制し、ようやく主流派を形成したよ

うに見えたが、木堂にはそうした思いはなかった。それまでの経験から政治家の心は移り気であるとともに、そうした彼らの心をとらえるのは権力との距離だと理解していたからである。実際、憲政本党の内部抗争に、そのことが顕著に窺えた[註26]。それに木堂の対抗勢力を支援している桂太郎らには豊富な資金があり、しかも政権を担当している現実があった。

それが一時的に収束して数年のうちに、又もや激しい対立が生じたが、木堂は最初から腹を決めていた。かつての対抗勢力でしかも木堂と同じ政党から脱党しようとしている政治家たちとは真っ向から対決せざるを得ないと考えていたからである。それが大正政変に際しての行動となる。そのことに勝利すると、それまでの党内の対抗勢力が脱党したのはいいが、そのことで大正時代のほとんどの期間は木堂が率いる党は先細りしつづけたのである。

それゆえ木堂は自らの政治的地位をかけて大政友会と合同し、その直後に政界から隠退をした。このときは、まさに心は空っぽであったはずである。しかし、地元の支持者たちには木堂は自分たちの「神」とさえ映る存在だった[註27]ため、隠退する事態は想像だにできなかったはずである。それゆえ再選させたのである。

それにしてもこの当時、道子がいたお陰でこの時期の木堂について知ることができる。

木堂は、道子の母親も大変可愛がった。また、道子の母親の方も、木堂に甘えていた。たとえば、あるとき木堂が側近と碁盤で向き合っていると、木堂の妻千代の前では「茹でられた伊勢海老のように固くつっぱりかえる」人なのに、そこでは横座りさえするほどで、甘えて「ねえおとうさま、今夜のおかず何にしたらいいのかしらねえ」というほどだったようである。

道子によると、これを聞いた木堂とは次のような会話をした[註28]。

「がんもどきでええよ、仲さん」

「わしが干物を買^いうて来てやるよ、仲さん」

祖父は母にやさしかった。

「長与のおかあさまは、お達者か。干物でも送ってあげたらどうじゃ。お呼びしてはどうじゃ」

すると、母は、しんから嬉しそうに笑って、がんもどきを煮て来ましょ、と立ち上がったのであった。

また、木堂は、古島一雄と2人で、道子に仕えるとでも見えるほど尽くす。たとえば、古島が海から毎日バケツに汐を汲んで来て、「海水浴」といっては、「ゼロゼロ」という道子の胸に塗^りたらしい。「さあ、日光浴をするんだぞ」「汐のきいているうちに、おてんとをあびるんだ」と言って、2人の老人は、「掌中の玉のごとくに」道子を扱い、その横で

木堂は「せっせと」蜜柑汁をしぼり、リンゴを磨り、「皮と果肉の間を、いっしょけんめい、取っとるんじゃ、道公よ」と言った。すると、古島は「ヒイヒイ」と馬鹿笑いをして、「じいさんは〔木堂のこと〕、嘘つきじゃの。皮と果肉の間に何があるんじやい」と言った[註 29]。

一方、道子自身も、大変旺盛な好奇心にあふれていたもので、家庭を訪れる人たちに物怖じせず接近する。それは先述した白樺派の人たちだけではなく。白樺派の人たちは、自らも白樺派の作家であった父親の健の人間関係だが、次第にその人物たちは、祖父木堂の関係者たちになっていく。

犬養の側近であった古島は、ずっと以前から知っていた。とくに古島は道子を、孫のように可愛がったということであるが、その古島を含めてさらに多数の人間関係を知っていくようになる。

熱海で療養していたある朝、木堂に起こされた道子が出会ったのは、1925年に亡くなった孫文の元秘書で、孫文が日本に亡命したときには重要な会見のやり取りや演説の通訳を務めた戴季陶であった[註 30]。1927年、戴は国民党右派の考えを宣伝するために来日し、日本各地の演説で、武漢政府に和平合作に応じるよう訴えていた。おそらくこのとき道子に出会った。戴季陶は、道子を可愛がり、発作を起こした彼女の背中をさすったり、一緒にお風呂に入ったりしたが、突然いなくなったということである。

戴のことは、木堂が最晩年になっても、中国要人とつながり、彼らが訪日すると丁重に扱っていたということの証左である。このような木堂の行為が後年犬養家に与えた影響について道子は、つぎのような証言をしているほどである。成人した道子が原稿のみの収入では病気をしたときに困るということで「商売でもしよう」かと母親に言うのと、「言っておくけど、相手が支那人だったらいっしょにやっても大丈夫だ」と言っただけで、「そういう気持ちがあるんです。それでいまでも、中共〔中国共産党〕と台湾から孫文先生を助けてくれたと必ず挨拶がくる」ようになったということである。これは木堂のお陰の何物でもない[註 31]。

また道子は、頭山満とも知り合うことになる[註 32]。頭山は、日本の国家主義者の元締め的な人物だったが、実は木堂とは常に一緒に中国問題で動いていたため、道子が頭山を知っていたとしても何ら不思議ではない。

木堂の道子にたいする配慮は、病氣療養のための資金を含めてさまざまな配慮をただけにとどまらない。木堂は道子の小学校への進学にも意見を述べて、そのようにさせているが、木堂は健を始めとする子供たちも孫も学習院に入学させている。

健の一家は、当初東中野に住んでいた。その頃道子の両親とも最初は、自由主義的な雰囲気のある文化学院か語学教育に最適だと思われていた聖心インターナショナルに入学させようと考えていた。実際、それで母親と2人で受験に行き、合格通知まで届いていた。ところが木堂は、真っ向から反対し当時東中野の家まで訪れ、「白金〔学校の所在地〕に行く



図3 1929あるいは1930年頃

には電車の乗りかえがある。代々木で乗りかえるとき、電車とホームの間にはまったから大ごとじゃ。いや、必ずいつかははまる」と言って、「東中野始発に乗ればそのまま行く」学習院に行かせたかったようである。道子によると、これは四ッ谷の木堂の家に健一家を引き取る工作の「第一歩の地固め」であった。四ッ谷からであれば、青山の外苑の所にあった学習院女子部に徒歩で通わせることができるからである〔註33〕。

しかし、もう一つ理由があったようである。木堂自身がすべての履歴書に「士族」と書かずに「平民」と書いていたにもかかわらず、子どもたちや孫までも学習院に進学させたのは、当時の学習院が明治の元勳や元老、それに皇室とも日々近すぎたので、その地位の重みを失っていたため、「自由闊達

の精神の、思う存分飛翔する余地」が残っていたからのようである。それに、政界のみならず社会的にも知られた「犬養」の身内が普通の学校に通えば、「犬養だ、犬養だ」と言われて「チャホヤされる」し、学習院であれば皇室から「宮家五摂政家元老」までが著名人で、「平民野党の犬養などはビリになる」し、「有名であることの虚しさ」も「身にしみて習える」。そして名門の貴族たちと同席することで「物怖じもしなくなる」し「犬養の家は、世々代々、野党であって欲しいから、そのためには正反対の貴族家族のどまんな中に、子供をほっぽり出す」ということも知られるため、ということだったと説明されているらしい〔註34〕。果たして真実そうだったのか分からないが、いずれにせよ木堂は道子と同じ家に住みたかったのであろう。木堂の想いが伝わってくるエピソードである。

3 健の政界進出の動機

さて、いよいよ木堂が政友会総裁に就任すると、道子の周辺もあわただしくなってくる。

まず、いつも自宅にいて道子や康彦そして母親の伸子との会話を楽しまつつ、机に向って文章を書いていた父親の健が生活を変えてしまった。政界に入ったからである。

その日のことを道子は鮮やかに記憶しているというが、それは友人も職業も生活様式もそして雰囲気も全く異なる生活に家族が入ろうとすることを初めて告げられたからである。このとき道子の母親の顔に涙が浮かんでいるのを見て、道子は不思議に思った。

道子の肺炎が治ったときに母親が涙したことは、当然と言えば当然なので驚きはなかった。しかし、いま目の前で目撃している母親が涙を浮かべていることについては、全く道子の理解の範疇を超えていた。母は壮士に面と向かって、「シュギシヤ」に突き倒されても泣くことはなかったし、道子が釘を踏みつけて足を貫通させても泣くことはなかった。それほど母親だったから道子は、この母親さえ「頼ってれば大丈夫と、しんの底から」頼っていた。その母親が道子には理解しがたい涙を流した。それゆえ道子は、驚きと不安が重なって母親の「膝に夢中になって取りすが」り、その涙の訳を問いただした。

すると母親は「パパ」が「お祖父ちゃまのお手伝いをすることになるかもしれない」と答えたが、道子にはそのことの意味が理解できなかった。「パパ」が父親である木堂の手伝いをするのは不思議でもなんでもなく、そのころまだ道子は木堂の仕事が何なのか理解できていなかったのである。「お祖父ちゃまは本を読んで字を書いて、植木のせわをする人」と思っていたからである（ただし同じ植木屋でも「上等の植木屋」ではあるが）。そして父親の健も植木の世話はしないが「本を読んで字を書く人」なのだから、お手伝いをして「つらくはないだろう」と考えるのが精いっぱいだったようである。

健は「政治なんかに入らないよ。四ッ谷〔木堂の住まいのある所〕なんか行くものか」と言いつづけていたのが、突然「心変わり」したため、道子の母親には「急に」という印象があったようである。

道子の母親からみると健は、木堂の妻を敬遠し、そして母親も千代を苦手とする意識もっていたため2人とも四ッ谷には近寄りたがらず、そのうえ木堂にたいしても健は親子関係の情を懐くのに時間がかかったほどゆえ、余計そのような健の考えを理解できなかったのであろう。またそれまでの健の交友関係が白樺派の面々であったことから彼らの自由奔放さと気楽に付き合うことのできる関係とは別れたくなかった、と考えているものと思っていたのであろう。

1929年10月になると、道子の周りでも次第に父親の健が政界に近づいていくのを実感する出来事が起こるようになる。三浦梧楼の別荘から鎌倉に住居を移したある日の夜、2階に寝ていた道子は階下で健と仲子が、次のように激しく口論している声で目覚めた[註35]。

「それはいやだわ」

母の涙声が、きつい語気で言っていた。

「そりゃ、おとうさまは・・・でも、いやよ」

間があった。

私はからだを固くした。びっくりした。心配になった。階下に行こうかしら、行って、なによ、ママがどうしたのよ、と聞こうかしらん。

ふいに、何かの投げられる音がした。

短い叫び声。

「あなた、ほんとに変ったわ。知らない人だわ。あたし、子供つれて行きます・・・」

「まだわからないか。行くなら行け」

階下はそのまま、しんとした。半開きの雨戸を、海からの風がひゅうと撫でて行った。私は仰天していた。何もわからないながらも、父と母とがもはや東中野〔健と仲子が仲睦まじかったと道子が記憶していた住居があった所〕時代の父と母の仲でなくなったことだけは、はっきりと知らされたのである。

行く？ どこへ？ どうやって？

物を投げるなんて。あのパパがママに・・・どうして？

私はいつか、枕を抱きしめて声を忍ばせて泣いていた。昭和四年十月のこと。

同月16日、政友会の第6代総裁に選出された木堂は、すでに千代夫人宛に遺言を書いていた。暗殺直後に古島一雄によって明らかにされたところによると、「葬儀は質素をむねとし告別式は近親者のみで営め、墓石の如きも質素のものを選び墓標には位階勲等をぬいて犬養毅之墓、墓石の横には備中庭瀬之人〔備中庭瀬之人という言葉は、実家の庭瀬の墓標に記されている〕、生年月日及び死亡の月日及び享年のみを刻む事、墓地は東京の然るべき所にせよ」という主旨だったようである〔註36〕。

ここまで覚悟をした木堂の並々ならぬ決意のほどを知っていた健は「おとうさんをひとりで放り出してよいものか」と考え、それまでかかわってきた芸術は「とどのつまり人間のためのものではないか。軍閥による人間性の圧迫を、政治によって解き放すこと」も、広い意味に解釈すれば「芸術ではないか」と健は考えた、とのちに述べたというが、道子はこの発言を「白樺を棄てた筈の人の棄てきれぬ白樺派的ロマンティズムがみなぎっていた」という印象を記している〔註37〕。いわゆる甘い考えであり、現実の政治のうねりを見据えたものではない、ということであろうか。

鎌倉に移る前から健は、こう考え抜いていた。そして「おとうさんには腹心が要る。議会政治というものを生かしつづける後継が要る・・・ぼくはこの次の選挙に出る」と決意していた。

しかしその後も、健が原稿を書き続けていたのを見て仲子は、「やっぱしパパは作家よ。はなれるもんですか。ペンの生活からは、はなれられやしなくてよ」〔註38〕と言っていたが、これはいわゆる希望的観測というのであろう。いや、分かってはいたが、そのことを信じたくなかっただけであろう。聡明で何事も理解できる仲子が、健の想いを理解できないわけがない。人は分かっていても信じたくないことがあるものだが、それが現在の幸福な日々と異なり、次第に政治が混んとしてテロが横行しはじめつつある時代であるため、賢明な仲子にはその世界に健を入れたくないし、また自らも家族としてその真っ只中で生活をしたくないとも考えたはずである。

そのときの健は、35歳の「青年文士」であった。出馬させようと動いたのは田中義一内閣で書記官長を歴任した鳩山一郎らで、衆議院が解散した1930年1月21日の夜に東京第2区の市区会議員を招集して意見を聞くと、全会一致で擁立することになった。また、神田から立候補する予定の者は地盤を譲り、下谷関係者は隠退することになり、かつての古島一雄の地盤をそのまま受け継ぐことになった。ところが、肝心の総裁の木堂は「黨員をさしおいて自分のせがれに総裁が金を使へるか」と述べたが、本音は「この息子を荒つばい政界に」出せないという想いから承知しなかった。

これを見た健が「大乘気」となって「文士はすつぱり止めて政治家になる、それが僕の前に開けた途らしい」というので、ついに木堂も賛成したらしい。しかし、木堂の心境は複雑であったに違いない。自分が味わった辛酸をなめさせたくないという想いが大きかったはずだからである。政治資金の問題だけではなく、そもそも健は政治家には向いていないということを考えていたとしても不思議ではない。犬養自身と異なって健は、対人関係に優しく、押しのきく性格でもなく、むろん腹芸なんかできるような性格でもなかった。皮肉にもそうであるがために犬養は健を愛おしく思っていたはずだからである。

同月22日に健は、記者に次のように心情を吐露している[註39]。

僕が院内に議席をもつてゐないとおやぢが不便らしいので立つことにしたのです、道楽なら始めから止した方がいゝのですが道楽はできぬ性分ですから、文士の方はこれつきりスツパリやめて政治家になつてしまふでせう、才能がこちらに向くのなら運命だから仕方ありません……

政治は無学だが白紙で年の若いものが入るのは党のために害を與へまいと思ひましてね時代の空気を敏感に感じてそれを伝えるのが役です、始めおやぢがむづかしくて健さんをだしてもようござんすかと中島〔守利〕さんなどがいつて下さるのをソツポを向いてゐましたが、しまひには「お前大丈夫かい、落ちやしないか」などと心配したり喜んだりしてくれましたよ……

このように健が話してる最中に木堂が入ってきて「おい、お前たつのか」と目を細くしたのを見て記者が「後継ぎができましたね」と聞くと、「政党は坊主と同じことで偉いものが後継ぎになるのだ、血筋などどうでもいい、今ちや二百五十人〔政友会の衆議院議員〕の後継があるよ」といったが、この発言を記者は「親心をかくした物いひだ」と推測している。そして、これまで健は木堂の応援演説を一日十数回も行った記録をもっているが、今回立候補すると、作家の横光利一や菊池寛らが応援演説をするらしいので学生や女性たちの人気者となるだろう、とその記事を書いた記者は報告している[註40]。

健の立候補を木堂は、心配しつつも喜んでおり、健本人もやる気満々だったのである。これでは、仲子が断念するよう求めても無理な心境になってしまっているのである。

木堂は政界を隠退するときに「政治に生きて政治に死ぬ」[註41]とまで述べて、生涯政治の中でのみ生きることを宣言して間もないときであった。仲子は、木堂が並々ならぬ決意でいるのを聞いたとはいえ、一抹の不安を感じたのではあるまいか。というのは、そのころ夫の健は次第に父親との距離を縮めつつあり、しかも心の空白を新たな想いであふれさせようとしていたように思われるからである。木堂も健の長女の道子を溺愛し、売れない作家であるため少ない収入の健を経済的に支援していた。優しい健の心は木堂にたいする疼くような思いで痛いほどであったのではなからうか。

そのことを一番理解していたのは、仲子のみであったに違いない。やはり木堂が政界を隠退後も政治に余生をついやすというのであれば、ますます心優しい健は、そのために何かをしようと言いだすのではないかと仲子が考えたとしても何ら不思議ではない。それゆえ予想した事態になったため、仲子は反対したのであろう。無駄な抵抗だとは理解しつつも反対したのであろう。

道子は「危機感を伴ったロマンティシズム」が次第に膨れ上がり、その心が健から「ペンを奪い去った」と見るが、そのことは認めつつも先述したように健が次第に木堂にたいして感じはじめた愛情で行動しようと決意した頑な想いも作用したと考えられると見るのは、言いすぎであらうか。

註

- 1) 伊藤隆「犬養毅」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第1巻, 吉川弘文館, 1979年) 746頁。
- 2) 犬養健「追憶(承前)」(『中央公論』1932年8月号, 152頁)。犬養健は、白樺派としての作品を残しているが、歴史的業績という点で言えば、1930年代に汪兆銘政権の創立に関わった記録である『揚子江は今も流れている』(文藝春秋新社, 1960年)という著書で名を残している。また、戦後衆議院議員として第4次吉田茂内閣の法務大臣に就任した時に、造船疑獄における自由党幹事長佐藤栄作が収賄容疑で強制捜査を求められたことにたいし、指揮権を発動して逮捕を無期限延期にしたことで知られている。このことで、指揮権発動の翌日に法務大臣を辞任した。なお、簡単な紹介であるが、拙稿「犬養健」(中村・久保田・陶・藤井・川邊, 町編『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版, 2010年) 70-71頁参照。
- 3) 犬養健「南洲翁を手本に心に期してゐた 亡き父首相の心境 凶変後始めて健氏が語る」(『東京朝日新聞』1932年5月19日付)。
- 4) 道子については、「犬養道子」(秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』東京大学出版会, 2002年) 59頁参照。
- 5) 犬養と古島一雄との関係については、拙稿「『影の男』古島一雄の献身」(同『犬養毅—その魅力と実像』山陽新聞社, 2002年) 10-62頁参照。
- 6) 現在も白林荘は残っており、所有者は犬養家とは関係がなくなり、筆者が2006年7月に訪れると、庭に孫文から贈られた「白松」が植樹されていた。そのことを記した説明書きが剥げ落ちているのを見ると、時の流れを感じた。
- 7) 犬養道子『花々と星々と』(中央公論社, 1974年) 66頁。
- 8) 鷲尾義直編『犬養木堂書簡集』(人文閣, 1940年)。これは、1992年に岡山県郷土文化財団から複製されており、本論文ではこれに依拠している。
- 9) 同上書, 384頁。

- 10) 同上書, 410 頁.
- 11) 犬養道子宛犬養毅書簡, 1927 年 6 月 8 日付, 同上書, 456 頁.
- 12) 同上書, 510 頁.
- 13) 山本四郎「三浦梧楼小論」(『ヒストリア』1960 年 2 月) 35 頁.
- 14) 岡山県郷土文化財団編(『新編犬養木堂書簡集』同財団, 1992 年) 280-281 頁.
- 15) 植原悦二郎「故犬養総裁を偲ぶ」(『政友』1932 年 6 月号) 39-40 頁.
- 16) 犬養道子「あとがき」, 前掲書『花々と星々と』319 頁.
- 17) 同上書, 184 頁.
- 18) 同上書, 98 頁.
- 19) 同上書, 183 頁.
- 20) たとえば, 犬養健宛犬養毅書簡, 1914〔大正3〕年 10 月 8 日付, 前掲書『新編犬養木堂書簡集』281 頁.
- 21) 渡辺鋼太郎宛犬養毅書簡, 1895 年 8 月 3 日付, 同上書, 147-148 頁.
- 22) 犬養健「父を語る—好奇心に答へて—」(額田松男編『起てる犬養木堂翁』同刊行会所収, 1930 年, 137 頁).
- 23) 国友弘行宛犬養毅書簡, 1923 年 2 月 12 日付, 前掲書『新編犬養木堂書簡集』97-98 頁.
- 24) 犬養道子, 前掲書『花々と星々と』184 頁.
- 25) なお, 隠退をめぐる地元の動きについては, 拙稿「岡山県下の革新倶楽部と政友会の合同前後における犬養毅と支持者たち」(『倉敷芸術科学大学紀要』第 19 号, 2014 年) 133-146 頁参照.
- 26) 拙著『犬養毅—ナショナリズムとリベラリズムの相剋』(論創社, 1993 年) 第 1 章参照.
- 27) 拙稿, 前掲論「岡山県下の革新倶楽部と政友会の合同前後における犬養毅と支持者たち」参照.
- 28) 犬養道子『花々と星々と』109-110 頁.
- 29) 同上書, 同頁.
- 30) 藤井昇三「戴季陶」(外務省外交史料館・日本外交史辞典編集委員会編『新版日本外交史辞典』山川出版社, 1992 年) 498 頁.
- 31) 犬養道子・今井清一「犬養木堂のことなど」(中公文庫編集部編『日本の歴史 別巻 対談・総索引』中央公論新社, 2007 年) 408 頁の犬養道子の発言.
- 32) 頭山満については, 藤本尚則『巨人頭山満翁』(政教社, 1922 年) 参照. 犬養は, とくにアジア地域に対しては, 常に頭山と行動を共にした.
- 33) 犬養道子, 前掲書『花々と星々と』208 頁.
- 34) 同上書, 70-71 頁.
- 35) 同上書, 239-240 頁. なお同書より引用した文章の漢字の読みについては, 原文の記載通りである.
- 36) 「故首相の遺言『葬儀は質素に!』」(『東京朝日新聞』1932 年 5 月 17 日付).
- 37) 犬養道子, 前掲書, 242 頁.
- 38) 同上書, 同頁.
- 39) 「文士生活を清算して御曹司健君の立候補」(『東京朝日新聞』1930 年 1 月 23 日付).
- 40) 同上.
- 41) 犬養毅「議員辞任の挨拶」(『木堂雑誌』1925 年 7 月) 4 頁.

※本論文(I)と(II)で掲載した写真は、「犬養木堂記念館」所蔵であり、本論文作成にあたっては同記念館の石川由希氏からいろいろご教示をいただいた。末尾ながら心から感謝申し上げます。

The image of Tsuyoshi INUKAI in his later years from the perspective of his family - based on the testimony of his grand-daughter, Michiko INUKAI (I)

Hideto TOKITOH

College of Science and Industrial Technology

Kurashiki University of Science and the Arts

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2014)

INUKAI is said to be a very strict person in the political world, which was testified by almost everyone who knew him. It is pointed out that he allowed no compromises not only toward his political enemies, but also toward other politicians in the same party when they did not share his opinions.

After the birth of the grand-daughter Michiko, however, INUKAI put an affectionate look on his face and acted very thoughtful and considerate. The person who could describe this in detail the most was Michiko. She was born as a first daughter in a family of INUKAI's second son, Takeru. Because she was weak from birth, INUKAI paid extra care and attention to her.

After Michiko's birth, he got a villa in Shinshu where he lived pleasantly. There, he built playground equipment such as a swing so that he could invite young Michiko to come and play anytime. He also gave financial support to his son Takeru who could not make a living as a writer at that time. Takeru and his wife Nakako were looking forward to this support. In other words, INUKAI arranged everything for the sake of Michiko.

Takeru was having troubles with his father from childhood because his father kicked his biological mother out of the house. However, the time finally came when both men became very close. Although Takeru was about to establish a presence as a writer in Shirakaba school, he decided to lay down his pen. Being motivated by INUKAI's deep affection toward Michiko and also consideration for Takeru and his wife, Takeru gave up his writer's career, became a secretary, and eventually ran for a seat in the lower house of the Japanese Diet in order to back up his father in the political world.